

批評の方法⑧

批評と研究



小林 稔 訳

大修館書店

批評の方法 8
批評と研究

© M. Kobayashi 1974

1974年2月10日 初版発行

訳者との協定により
検印を廃止する。

訳者 小林 稔
発行者 鈴木敏夫

株式 大修館書店
会社
(101) 東京都千代田区神田錦町3-24
電話 東京 (294) 2221 (大代表)
振替 東京 40504

印刷／壮光舎 製本／謙文社

「批評と研究」について

本書は学問的△研究▽を△批評▽との対比で扱ったもので、主としてキャロライン・スパージョンのイメージ研究を中心に話が進められている。スパージョン女史 (Caroline Spurgeon, 1869-1942) は、ヘッドフォード・カレッジの講師を経てロンドン大学教授となり、一九三五年、主著『シェイクスピアのイメージャリー』 (*Shakespeare's Imagery and What It Tells Us*) を出して

学界に大きな影響を与えた。スパージョンのほかには、ジョン・リヴィングストン・ロウズとウィルソン・ナイトの二人が比較的大きく取り上げられている。ロウズ(John Livingston Lowes, 1867-1945)はコールリッジの作品の出典の研究『ザナデューへの道』(*The Road to Xanadu*, 1927)で知られているアメリカの学者で、ハーヴァード大学で教えていた。ウィルソン・ナイト(G. Wilson Knight, 1889-)はリーズ大学の教授、主にシェイクスピアの作品を対象とする独自のイメージ批評で知られ、一九三〇年に出した『火焰の車』(*The Wheel Fire*)はかゝ多数の著書がある。

小林 稔

目次

批評と研究について	iv
一 スパージョンの業績	3
二 イメージ批評の方法	13
三 シェイクスピア学	41
四 アカデミズム批評	52
五 スパージョンとウィルソン・ナイト	69
原注	77
訳者あとがき	79
索引	86

批評と研究

一 スバージョンの業績

文学の分野での学問研究と批評との間柄は、このところあまり芳しいものではなかった。批評家にとって学者とは、アカデミックであまりばつとしない時代遅れの人物、偉大な詩に対するその関心は、作品の中のセミコロンを数えることにしかないような人間である。他方、学者にとって批評家とは、無知と軽卒とを等量ずつ混ぜ合わせ、文学について、はなはだ雑な判断をでっち上げる気違いじみた人物と映ずる。そしてこの両者相互の関係にとっては不幸なことだが、双方の非難はおおむね当たっているのである。大学には実際あまりばつとしない時代遅れの人物が大勢いるし、また気違いじみた連中にも事欠かない。大方の学者はいちじるしく想像力に欠けているし、また批評家の大部分には、学問知識が足りない。だが現代の何人かの批評家は、エズラ・パウンドのように、性急な判断を下しがちな批評の領域での実践を、なんとか真の学問研究と結びつけ、また何人かの学者は批評に対して真に想像力豊かな貢献を果たす

ことに成功している。後者の中で特に群を抜くのがキャロライン・F・E・スパージョンで、彼女は一九四二年、七十四歳で没し、半世紀にわたるシェイクスピアおよびチョーサー研究の目ざましい生涯の幕を閉じたのだった。彼女を特に有名にしている著書『シェイクスピアのイメージリーとそれがわれわれに語るもの』(Shakespeare's Imagery and What It Tells Us)は、ほとんどその生涯の最後、一九三五年になって出版されたが、ある意味でこれは、彼女のすべての仕事の頂点を画す著作である。

スパージョンの最初の著書は、一九一三年、ロンドン大学の英文学教授時代に出版された『イギリス文学における神秘主義』(*Mysticism in English Literature*)だった。この本は特に学問的な本でも、批評的な本でもない。イギリスの詩と散文に現われる神秘思想の概観という形をとっているが、その内容は神秘主義について書かれた小冊子というところである。この本の根底には一種の片寄った見方があって、そのためスパージョンは審美的基準には一向考慮を払わずに、次のように書くことができるのである。「自分たちのもつとも深遠な思想、もつとも高邁な理想を詩の衣を着せて表現するのが、つねにイギリス人の習わしだった。われわれはプラトン、カント、デカルトのような人物を持たないが、シェイクスピアとワーズワスとブラウニン

グを持っているのである。」彼女は、ソロモンの雅歌が、性愛のイメージによって描かれた、神による魂の求愛の物語のアレゴリーとして書かれたと本気で信じているように見える。彼女は神秘的体験と単純なヒステリー症を区別する術を知らず、十四世紀の有名な神秘家で、七日間病床にあり、その後六時間にわたってどうやら痙攣の発作らしきものに見舞われたジュリアーナの体験を語る際、その一切を、神に近づく他のどんな手段にも劣らず妥当なものであると考えている。またこの本の最後のところで、彼女は「科学と哲学の究極的結論も神秘主義者の立場を裏付け、説明さえするような傾向を示している」ことを証拠として、神秘主義への支持を表明しようとしているが、彼女のいう「究極的」結論というものも、結局はおおむねベルグソンのことなのである。この本は、特にプラトン以来の神秘思想を時代順に取上げて簡潔にスケッチしていることなど、価値のある点もあるのだが、概してほとんど知的関心を惹くところのない著作で、主に文学上の神秘主義者たちにとって価値を持っているにすぎない。

スパージョンの次の著作、一九〇八年から一九二四年にかけチャウサー協会から六部に分けて刊行された『チャウサー批評の五〇〇年』(*Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion*)は、純粹に学問的な仕事であって本書には関係がない。あとは定期的に補遺を追加

するだけで十分な決定版として、おそらく後世に残るこの仕事の中で、彼女は一三五七年から一九〇〇年に至る間のチョーサーに対するすべての言及を要約し、記録したのである。

一九二八年の『キーツのシェイクスピア』(Keats' Shakespeare)はチョーサーについての資料編集の仕事と同様、純粹に学問的な仕事として企てられたものようだが、でき上った本は、実際には、はるかにそれ以上のものを指向している。一九二七年八月スパーションは、キーツがローマで読み、書き込みがいくらか残っているという、友人セヴァーンのシェイクスピアのテキストを、プリンスストンのジョーゼフ・アーマー氏が所有していることを知らされた。この本を調査する許可を得た彼女は、これがキーツ自身の使ったシェイクスピア劇のテキストであり、キーツがその生涯の最後の三年半の間、何度も繰り返して読み、広い範囲にわたって、下線を引いたり、印をつけたり、注釈を書き込んだりしていたこと、そしてこの本の存在は、それまで学者にはまったく知られていなかったことなどを発見した。ハンプステッドのデイルク・コレクションの中に含まれているキーツの書き込みのあるシェイクスピアの二冊の本(一六二三年の二折本の^{フオリオ}リプリントと詩集一冊)と共に、この七巻のテキストは、キーツに多大な影響を与えたこのより偉大な詩人、シェイクスピア、に対するキーツの正確な反応を知る

上で、はなはだ貴重な記録となつたわけである。「新しい資料に基づく記述的研究」という副題を添えた『キーツのシェイクスピア』は、この注目すべき掘り出し物に対する彼女の分析にはかならない。これは見た体裁も美しい本で、非常に多くのファクシミリが挿入され、キーツの書き込みがリプリントされ、詳細に論じられている。

スパージョンはその著書を三つの部分に分けている。第一部ではキーツの書き込みとその意味が論じられ、第二部では『あらし』と『夏の夜の夢』からの引用と、それに対応する『エンディミオン』からの引用とが並べられていて、内容や言葉の上の名残りを例証しようとしている。そして最後の部分では、もっとも書き込みの多い五つの劇、『あらし』、『夏の夜の夢』、『以尺報尺』、『アントニーとクレオパトラ』、『トロイラスとクレシダ』の書き込みのすべてがリプリントされている。そういうわけで、この本の七分の五はリプリントに当てられており、七分の二、ページ数にしてほぼ五〇ページだけが論評にさかれているにすぎない。だがこの僅かなスペースの中で、著者は多くの洞察力に富んだ主張を行っている。彼女がまず行ったことの一つは、きわめて簡単なことで、それだけに多くの学者にはまったく念頭に浮かばなかったであろうと思われるようなこと——すなわち、キーツがどの劇を一番頻繁に読んだかを、書き

込みからだけではなく、本の紙の汚れや損耗の度合いから、推定するという作業で、これらの作品の中には明らかに幾度も繰り返し愛読された『あらし』のような作品から、二折版全集では読まれ、書き込みもあるのだが、プリンストンのテキストではどうやらまったく読まれていないと思われる、『トロイラスとクレシダ』のような作品などが含まれている。

スパージョンの主題が、詩人の読んだものが詩人の書くものへ変容する過程にある以上、ジョン・リヴィングストン・ロウズが、コールリッジにおける同じ問題の研究『ザナデューへの道』(*The Road to Xanadu*)で用い、見事な成功を収めた方法を、彼女が採用したのは当然のことだった。ロウズがその「偉大な本」の中で行った「魅力的な研究」の功績に対して彼に敬意を表したのち、スパージョンはその方法を、連想の理論のような細部に至るまで、正直に利用している。たとえば、キーツが印をつけながら用いなかったシェイクスピアのあるイメージが、『エンディミオン』の一部と同時に名残りをとどめているシェイクスピアの一節とドレイトンの一節とを、キーツの心の中で結びつける連想の結び目の役割を果たしていたのだろうと述べている所などが、その一例である。

『キーツのシェイクスピア』の主な限界は、スパージョンの学者らしい保守的な態度であ

る。彼女はキーツ自身の生活やキーツのシェイクスピアに対する自己同化の問題などに立ち入ることを好まず、自分の用いた本の劇に対する脚注として引かれたジョンソン博士やステイヴンズのシェイクスピア批判に対して、キーツが書き込みの中で示している激しい反応については、まったくいいほど触れていない。キーツはこれら批判の言葉を太い線や渦巻印で抹消し、「見よ、またしてもばか者が！」とか「相も変らずお前は口汚い中傷の徒たらんとするのか？」といった寸評を書き込んでいる（これらの言葉についてスパージョンは、ジョンソン博士の折目正しい無味乾燥な劇の批評に対する、キーツのユーモラスな苛立ちと軽べつの表明であると述べている）。彼女は『あらし』の中のキーツの書き込みの多くが、もっぱらシェイクスピアの投影——一種の魔術師＝劇作者——としてのプロスペローに集中しているかに見える点には、注意を払っていない。だがキーツ自身、ハムレットがシェイクスピアの自己表現であるという意見を持っていたことを念頭に置けば、こうした現代的考えもキーツの場合には充分妥当するものである。また彼女は、この本の中でキーツが重要な詩として印をつけたシェイクスピアの詩行と、個人的な、些細な理由から、あるいはまた警句的な表現ということで、印をつけた詩行（事実キーツは相当数の古いことわざに印をつけている）とを区別

するための、なんらの批評的原理も持ち合わせていない。彼女のやり方でいくと、どちらも単なる印ということですまされてしまう。最後に彼女が『エンディミオン』の中に見出しているシェイクスピアの名残りや、類似の箇所多くは、率直に言ってしまったえば、はなはだ疑わしいものである。

この本の主要な欠陥は、スパージョンがキーツのシェイクスピアを発見する以前、一九二五年に出版されたジョン・ミドルトン・マリリーの『キーツとシェイクスピア——一八一六年より一八二〇年に至るキーツの詩的生活の研究』(Keats and Shakespeare, A Study of Keats' Poetic Life from 1816 to 1820)と比較して見るといっそう明らかになる。スパージョンはマリリーの「感動的で説得力のある叙述」に対し、その恩恵を「深く」蒙っていると述べているが、キーツが単に、シェイクスピアの天才に感情的に圧倒され、時代の上でこの二人の間に来るどんな詩人よりも精神的にシェイクスピアに近いばかりでなく、また劇作者としての専門的な目で意識的にシェイクスピアを研究していたこと、そしてまた事実『エンディミオン』以後の彼のすべての詩は、彼が生き長らえて書くことのできなかった劇のための明らかな準備であるといった、マリリーの説の中心となっている洞察を、ほとんどまったく利用していない。これ

に対しマリーの本は、神秘主義と形而上学的宗教性〔文学作品を知るとはそれを創り出した人間の魂を知ることである〕や、いわゆる〈魂の知識〉による理解が〈論理的精神〉による理解よりも優越しているといった所説のためにあいまいなものとなり、そして純粋な詩は神の靈感による啓示であり、キーツはその啓示をシェイクスピアによって見出したのだから、シェイクスピアは文字通り神の化身なのだという、いささか奇妙な考え方で、そのクライマックスに達する。だが、にもかかわらず、もしキーツの使ったシェイクスピアを、マリーがこの本を書いたとき利用することができたとすれば、彼はおそらくスパージョンよりも多くのものをそこから引き出したことだろう。というのはマリーの場合、彼がまさに途方もないことを考え出すゆえに、たとえこじつけのように見えてもそれなりに真理を射止めることがままあるからである。理想的な組み合わせを考えれば、マリーのような洞察力をそのずさんな点を抜きにして持つような、あるいは逆に、スパージョンのような学問をその臆病さを抜きにして持つような批評家ということになるのだろうが、いまのところそうした卓抜した人物は、このキーツのシェイクスピアに対する関係という魅力的な批評上の問題にまだ取り組んでいないのである。

スパージョンの最後の仕事、シェイクスピアのイメージの研究は、深みにおいてまだ完全な